

「五葉山の魅力」

五葉山自然倶楽部
創立10周年に寄せて

③③

田植を終え一段落した六月中旬、いつも決まっていた五葉山登山をする人がいた。その人は五十歳くらいで、背丈は百六十センチほど。

小友村(現遠野市小友町)の鷹鳥屋から荷沢峠、川口、八日町を経て、松山に入る。午後二時ごろに私の家に着き、その晩泊まって翌日早く五葉山へ向かう。

昭和十八年、私が小学校四年生の時。この小友の旦那さんに連れられ、初めて五葉山登山をすることになった。

登山道には大人二人が両手を広げて木にまわし

ても繫げないほどの太さの木もあった。「なんと太い木だ」と驚きの連続だった。

ヒノキアスナロ、ブナ、ケヤキの巨木の中を進む。途中「水飲み場」といわれるところで一休みし、頂上を目指した。緑の彩りの中に赤く点在していたのはヤマツツジの花であった。

急峻な登山道を登り、

丸みを帯びた細長い濃緑の生き生きとした葉の低い木の群落があった。それがシャクナゲであることが教えられた。この群落を抜けると視界が広がった。空はどこまでも青

再会したい「小友の旦那さん」

住田町上有住 紺野 一郎

別当となっている神社との初めての対面である。

祖父・吉之助、父・十郎右衛門から聞かされてきた神社。大風で大破した山頂の神社を、寛政三年(一七九一年)に恒久的

の殿舎として石宮を建立したと記録にある。風雪に耐え今日に至っている神社に、先人たちの熱い思いを汲むことができた。確か、この五葉山神社がある。

旦那さんはあたりの枯れ枝を拾ってハセを作り、草を集めてこれに架ける。確かな実りを願うにあたった準備であった。その一つひとつの動きの中に、誠実さや真面目さがにじみ出ていたように思えた。「この山

の木や花は生き物だ。折ったり採ったりするな

よ」と、諭すように静かに話してくれた。五年生の時も一緒に登山をさせていたのだ。

しかし翌年も、また翌々年も旦那さんは来ることはなかった。戦争が激しさを増していったことと関係があったのだろうか、今も分からない。

五葉山の稜線に鎮座する五葉山神社。建立から二百十八年が経つ。風雨や地震により屋根や柱が

傾き、できるだけ早く直したいといつも気にしている。みんなの力を貸していただき神社を整えたいと思う。

もう一度訪ねたいのがあの祠である。幼かった私に、五葉山への接し方や神を崇める意味を教えてくれた小友の旦那さん。たった二回の登山であつたが、今なお私を導いてくれている「一心の師」でもある。

【執筆者プロフィール】住田町上有住在住、七十四歳。五葉山火縄銃鉄砲隊伝承会会長、五葉山神社責任総代、八幡寺護寺会会長などを務めている。



季節の彩りを添え、登山者を待つシャクナゲ。遠い思い出は今なお記憶の中に息づいている

リレー
エッセイ